



Title	仏教における雨季の逗留生活に関する基礎的研究 : VarSAvastuの再校訂、及び読解研究
Author(s)	生野, 昌範
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49134
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 ^{しょう}生 ^の野 ^{まさ}昌 ^{のり}範

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 2 1 6 7 0 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 20 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

文学研究科文化形態論専攻

学 位 論 文 名 仏教における雨季の逗留生活に関する基礎的研究—Varṣavastu の再校訂、及び読解研究—

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 榎本 文雄

(副査)

教 授 荒木 浩 講 師 堂山英次郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、インド仏教の出家者（僧）が雨季に行っていた一ヶ所に留まる定住生活（安居）の実態を解明するための基礎的研究として、基本資料の一つである『ヴィナヤヴァストゥ』の第四章「ヴァルシャーヴァストゥ」の再校訂とそれに基づく読解研究を行い、さらにこの両者を踏まえて安居の実態を様々な点から論じている。

本論文の構成は、安居の実態解明を中心とした本論部、「ヴァルシャーヴァストゥ」の再校訂テキスト部、その読解研究部の三部からなり、関連文献の『ヴィナヤストゥラ』『ヴァールシカーヴァストゥ』の再校訂とそれに基づく読解研究も合わせ行われている。

本論部は、まず、「ヴァルシャーヴァストゥ」のテキスト伝承の特異点を提示し、ついで、現代の書物では目次と目次の抜粋に相当するウッターナとピンダ・ウッターナの関係に関する新たな事実を見出す。このあと、本論部は安居の実態解明に入り、まず、僧は、彼らのための禁令の集成である「ブラーティモークシャ」を遵守する以外に、ある特定の住処にのみ通用する「行いに関する取り決め」をも遵守しなければならないことを明らかにする。ついで、僧院内の個室（ヴィハーラ）の分配方法について考察し、それが托鉢に用いる鉢の分配方法と同一であることを突き止める。さらに、安居に不適当な住処の記述を考察し、それが安居の停止を許容する場合と深く関連することを究明する。また、安居中に規定領域外での外泊が 7 日間許可される場合を考察し、その過程で以下の二点を論じる。まず、類似性の高い「覆鉢羯磨」と「学家羯磨」の相違を考察し、前者は根拠なく僧を告発した在俗信者に対して僧団全体が行うものであり、後者は篤い信仰心から過度の布施を行って貧窮している在俗信者に対して行われることを明らかにする。二点目として、現在、学界で懸案となっている、女性が正式の出家者（比丘尼）になるための条件に関する問題を解決する糸口となる用例を考察する。その他、他の住処において僧団分裂の危惧がある場合、7 日以上の外泊が許可されることを『ヴィナヤ・ウッタラグラント』の記述と比較しつつ明らかにする。最後に、『ヴィナヤストゥラ』『ヴァールシカーヴァストゥ』の読解研究から、病気の僧も地所を確保できるが、ハンセン病患者には住居制限があることを突き止める。

論文審査の結果の要旨

日本は世界有数の仏教国であり、年間に出版される仏教書は膨大な数にのぼる。しかし、そのほとんどは仏教の教理・思想の解説・研究であり、仏教の実態についてはあまり関心が向けられてこなかった。最近、この分野においても国内外で研究が隆盛となり、各種の概説書や用語辞典も出版されているが、不明な点は未だ多く、とりわけインドの仏教者の具体的な生活実態の詳細は殆ど未解明である。本論文は、インド仏教の修行生活の中で重要な位置を占める安居に焦点をあて、その実態を克明に究明せんとする学術的意義の大きな研究である。

インド仏教における安居を規定したサンスクリット語の仏教文献「ヴァルシャーヴァストゥ」の既刊校訂テキストには不備が多く、公刊されている原典写本の写真版も極めて不鮮明である。そこで、本論文では、ドイツが所蔵する世界で最も鮮明な写本写真が解読に使用され、さらに「ヴァルシャーヴァストゥ」の漢訳やチベット訳が綿密に対照され、また「ヴァルシャーヴァストゥ」と同じ教団に属していたと考えられる『ヴィナヤスートラ』を中心とした種々の関連文献が渉猟・検討されて、「ヴァルシャーヴァストゥ」の精密な再校訂テキストが作成されている。対照に供された「ヴァルシャーヴァストゥ」の漢訳は、『大正新脩大藏經』版のみで済ませる内外の研究書が多い中であって、高麗版も利用され、「ヴァルシャーヴァストゥ」のチベット訳も現代の学界の水準に沿った5種類の版本が参照されている。『ヴィナヤスートラ』の対応箇所を検討にあたっても、チベット訳のみで現存する浩瀚な註釈のみならず、幅広く関連文献が渉猟・参照され、難解を極める『ヴィナヤスートラ』の精密な解読がなされている。以上の厳密な文献学的手法に基づいた正確な原典理解によって、本論文は、安居の中の重要な諸局面の実態を、当時の人々の息遣いまで感じられる程、克明に再現することに成功している。

日本の研究者の間では、それ自体として内容解明が必要な漢訳の仏教術語がそのまま論述に用いられる風潮が根強いのに対し、本論文では、正確さを期する余り引用原典の翻訳が些か生硬である点を別にすれば、的確な現代日本語で仏教術語が説明されている。ただ、それだけに、原典写本の形状や材質、「ヴァルシャーヴァストゥ」以外の諸文献の全体的な性格やそれらの仏教文献中の位置づけなどに関して、専門家以外にも容易に理解できる簡潔な説明が付けられていることが望ましい。また、本論文全体を通して、国内外における従来の研究が的確かつ周到に提示され、研究史の調査が丹念になされていることは看取できるが、その一方では、これらの内外における従来の研究の中で、本論文が如何なる意義を持ち、それが将来の研究にどう発展するかに関して、より詳細かつ総括的な位置付けがなされることが期待される。例えば、地域・時代に応じて変化する古典インドの暦との関係、また「ヴァルシャーヴァストゥ」を含めた『ヴィナヤヴァストゥ』の成立問題やそれらと『ヴィナヤスートラ』との伝承史上の相関関係などがここに挙げられよう。もっとも、以上の課題は本論文の学術的意義を損ねるものではなく、むしろ今後の研究の進展に展望を開くものである。よって、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定される。